

宮本輝「アルコール兄弟」論

藤村 猛

安田女子大学 文学部 日本文学科

要 旨

一 はじめに

宮本輝の「アルコール兄弟」は、会社の組合活動をめぐって反目していた「私」と島田が、偽の和解をして、翌日には敵対するという物語である。彼らの思い―「優しくなればいい」と、現実の行動での乖離を彼らの言動から押さえ、最終場面での敵対行動に注目し、この作品の特徴と限界を考える。

キーワード

組合活動、優しい世界、和解と敵対、赤穂浪士の討ち入り、二重の相対化

「アルコール兄弟」(『別冊文藝春秋』一九八五年新春号)は、十年間反目し合っていた「私」と島田が、酒を飲んで和解をするが、翌朝には敵対行動を取るという話である。読みどころは、十年間の反目にも関わらず、酔っ払った島田が自分の信念や思いを語り、それに「私」が賛同し和解するところや、翌朝に、昨夜の和解にもかかわらず、二人が敵対行動を取るところである。

だが、この作品に描かれているような会社と組合の激しい対立は、現在ではあまりなく、かつ、結末での二人の瞞し合いが分かる。と、前夜の彼らの酔っ払った熱弁や和解が浅薄に見えてくる。そのせい、作者の宮本輝は、この作品を「あまりにも、未成品すぎる」と、全集に収録しなかった。

確かに、この作品は成功作とは言い難いが、島田の言う「優しく、優しく、人間がみんな、やさしくなったら、それでいいんだ。」(115)³⁾という考えは、それはそれで一つの考えだし、彼の言う「誰に何と馬鹿よばわりされようと、曲げられねえ俺の考え方なん

だ」(115)には、それなりの信念の重みがあり、注目に値する。ただそれが行動に結びつかず、躊躇なく反対の行う点に、彼の軽さと弱さがある。(それは、語り手の「私」も同様である。)

しかし、考えようによっては、そんな矛盾に人間の本質があるのかもしれない。彼らの大仰なセリフや行動の背景に、理想と現実の差や生きていることの哀しさが潜んでいる。安藤始氏も言うように、「会社の中で、それなりの地位を確保していくためには、自らの良心を覆い隠さねばならない」し、「彼らにとつてもそこには深い屈辱があった」ろうし、「それに耐えることもまた生きていく手段」であつたろう。問題は、それら「良心を覆い隠さねばならない」とや「深い屈辱」が作品から感じ取れないことである。

また、作品は、二人の回想や和解を経て、翌朝の闘争場面に進み、守衛のセリフ(「赤尾浪士の討ち入り」)で終わる。つまり、この作品は、「やさしさ」による二人の和解→翌朝の闘争→「赤穂浪士の討ち入り」(守衛の評価)という変化を有する。つまり、二重の相対化がある。

「私」と島田の言動や心情を押さえ、作品の構造を考慮して、作品の特徴と限界を考える。

二 酒場にて—島田と「私」—

作品冒頭で、酔っ払った島田は、敵対している「私」に、自分の「考え方」(「優しく、優しく、人間がみんな、やさしくなったら、それでいいんだ。」)を、「世の中にはまったく通用しないよ。通用

しないけど、でもこれが俺の考え方なんだってものは、やっぱりあるじゃねえか。そうだろう？」(109)と熱っぽく語る。

続いて、彼は「私」との過去や二人の関係を語る。

「おい、入社試験で先に筆記試験があつただろう。あのとき、お前、俺の前に坐つてたんだぜ。覚えてるか」(110)

そう語る島田は「呂律が怪しくなつてい」て、「うなだれて上目使いに私を見つめた目に、黒い部分は殆どなかった。」(110)(彼は「酔うといつそう三白眼になる。」しかし、彼は泥酔したのではない。酔つてはいるが、反組合活動をする「私」の動きを探つていた。(それは、「私」も同じである。)

「十年だ。入社試験の日から、ちょうど十年だぜ。仲良くしていただいたのは最初の一年間だけで、それ以後は、会社の廊下ですれちがつたってドブネズミかゴキブリを見るみたいにして口もきかなくなりやがつた。」(110)

しかし、反目しあつていても、「私」が好きだつたと言う。

「だけど、俺は、お前を好きだつたんだ、お前を。酔つてるから言うわけじゃないよ。お前だけは好きだつたんだ。ほんとはぜ」

と言つた。それから恥しそうに微笑んだ。(110)

「私」が「口もきかなくなりやがつた」理由は、島田が会社の組合に入ったからであつた。「私」たちの会社は、「新聞社の直属の広告代理店」で、「社員数二百三十人」の「小会社」(118)であつた。(ちなみに、今から十年前の組合員数は六十五人であり、五年前は七十五人、現在は六十一人である。)

「私」はその時（九年前）の状況を、次のように語る。

「お前が組合に入ったことが判った日に、同期入社の人十二人は、常務に直接呼ばれて、優しい笑顔で昼食会に誘われたんだぜ。（中略）とにかく正社員になって半年目だから、こっちは殊勝にしているしかないんだ。組合員と一緒にお茶を飲んだだけで、どんな話をしたんだって根掘り葉掘り訊かれるし、下手な真似して広島支社なんかに島流しにされてみる。それっきりだからな。お前には悪いと思いつながら、ああするしかなかったんだ

よ」(11)

会社と組合の反目や軋轢によって、二人は疎遠になる。しかし、島田が突然組合に入ったのにも理由があった。

「俺が慌てて組合に入ったのは、次の人事異動で、広島支社に行かされるってことを部長に耳打ちされたからなんだ。俺は、親一人子一人で、お袋はリユーマチで寝たり起きたりだ。お袋を東京にひとり置いとくことも、連れて行くことも出来ねエ。」

(11)

この人事異動は、当時彼が親しかった組合の副書記長・平松との関係を、会社が誤解したものだ。島田にとって、病気がちの母親の件もあり、「広島行き」は受容できるものではなかった。困った島田は組合の平松に泣きつき、組合の力で支社行きを避けたのであった。それを聞いた「私」は、

「俺がお前だったら、やっぱり組合に入っただろうな。共産主義も資本主義も関係なしにさ」(113)

と言ひ、自分でもそうしたらだろうと認めている。（だが、島田はそ

の後、緊急避難的に入った組合の中心メンバーとなり、組合活動を熱心に行う。）

「私」の言に頷いた島田は、続けて、主義の無力さを説く。

「主義が、世界を平和にしたことがあったか？ 平和主義、リベラリズム。そこにどんな実的な理論と方法がある。ないよ。みんな絵に描いた餅だ。嫁と姑の問題を、イデオロギーが解決出来るか？ それすら解決出来なくて、何が主義だ。何が哲学だよ」(114)

もちろん、主義や哲学が「みんな絵に描いた餅」というのは言い過ぎであり、「嫁と姑の問題」は個々の問題であり、「主義」とはレベルが違う。だが、「私」は島田の言うことに賛同する。「私」も島田と同様に、家庭に問題を抱えており、嫁と合わず「自分の家があるのに、アパートに一部屋を借りて住んでいる母」(114)がいた。

「俺も正直に言うよ。お袋が死んでくれたら、家の中、平和になるのになアって思ったこと、何度もあるぜ。俺の女房も、どうして俺のお袋に勝とうとするんだ。お袋もそうだよ。もう、どうしようもない。家に帰りたくなかったぜ」(114)

以上のように、「私」は嫁姑の問題に苦しんでいるが、結局はどうしようもできず、放置している。

三 島田の主張と「私」

思わず出た「私」の弱音に対して、島田は乗ってくる。

「そこなんだ。」

島田はふいに私の顔面に人差し指を突きつけた。指は、二本にも三本にも見えた。

「優しくなつたらいいんだよ。優しく、優しく、人間がみんな、やさしくなつたら、それでいいんだ。そうなつたら、世の中の難しい問題なんて、みんな解決するぜ」(115)

しかし、「私」は島田の言葉に納得せず、「溜息をついて目を閉じ」、「どうやって、人間全部が優しくなるんだ」と聞く。島田は「そんなことは不可能だ。お前、いまそう思ってるだろう」と言い、私の「思ってるよ。当たり前だろう」との回答を聞き、「ところが、俺は不可能じゃないと考えてる」と言う。そして、「それ以外に解決の道はないんだ」(115)とも断言する。この考えが組合の連中はもとより、世間からも「馬鹿」にされることは承知の上である。彼は言う。

「だけど、これが、誰に何と馬鹿よばわりされようと、曲げられねえ俺の考え方なんだ」(111)

この考えを実行できれば素晴らしいことだが、現実的には困難事であろう。だが、入社当時の島田は「東京生まれで東京育ちなのに、どう見てもやまだしにしか見えない、それでいて機知に富ん(114)でいて、「同期入社」の連中の中で、この島田が一番優しそう顔を「私」(116)た。彼は昔から、そういう考えを持っていたのかもしれない。

おそらく十年前には、二人は友人になれる可能性があつたらう。十年間の会社勤めと組合活動が、彼を「三白眼」(110)の男に変え、彼に対する「私」の対応も変えた。「私」は「何年も、彼や彼の仲

間をドブネズミかゴキブリみたいに嫌ってきた」(114)のである。これでは、まともな友だちづきあいは無理だろう。

しかし、彼らが言うように、組合員か否かがそんなに重大事だろうかという疑問も生じる。個人よりも会社が大事だという時代の雰囲気⁶を考慮しても、両者の反目や憎悪は普通ではない。

そういう二人が酔つ払って(もしくはひどく酔つた振りをして)、自分たちと対極的な「優しい世界」を想う。「私」は、「世界中の人間がみんな優しくなっている光景を想像した」(116)そして、私は島田に右手を差し出し、

「俺は、お前を好きだつたんだ」

と言つてから、島田の手を強く握りしめた。

「そうだよ。みんな優しくなりやいんだ。簡単だ。お前の考え方は正しい。俺だけは支持するぜ」(116)

と言う。「私」は酒による興奮もあつたらうが、嘘は言っていない。過去に島田を好きだったのも事実だろうし、島田の考えも正しいと思つている。ただし前述したように、それは実行しにくいし、「みんな」となると、現実的には不可能だろう。

島田は「両手で私の右手を包み、烈しく上下に振」る。そして、「私」の想像——「世界中の人間がみんな優しくなっている光景」——を察し、「優しくなろう、優しくなろうと努力してるこの俺には、人の心がびたりと読める」(116)とまで言う。それを聞いた「私」は、「何十年も消息の知れなかつた親友と再会したような心持になり、「酒のせいじゃない。そう胸の中でつぶや」(117)く。ここには、両者の考えの一致や和解がある。もちろん、彼らの和解は、お

互いが本音を隠した上でのものである。

四 新組合結成と「友だち」

島田がトイレで席をはずしたとき、「私」は店の電話機を見る。それは、第二組合結成を意識したものだ。明日は、島田の組合に対抗する第二組合結成の日であった。

新しく就任した常務は、前の常務よりも労務管理、とりわけ組合つぶしのプロであった。私は一年前、常務の命を受けて、一度失敗した第二組合づくりを秘密裡に進めてきたのだ。私の役目は、殆ど終わり、あしたから二年間、第二組合の委員長をつとめるだけである。春闘時と、年に二回のボーナス時だけ、私は組合員たちにほんの少し嘘をつけばいいのだ。三年後、私は営業一部の部長に昇進する約束になっている。(120)

「わたし」に後ろめたさもあつたのか、席に戻ってきた島田に、五年前の幻となった第二組合について喋る。その後、島田が店内のダイスの客のところに行き、「私」は店を出る。飲み代を「私」のツケにしたのを島田が知って、追いかけてきて、「きょうは俺が払う」と「無言で握手を求めた。」(119)

「友だちに返ろうじゃねエか」
私が言うくと、島田は、
「俺はずっと友だちだったぜ。口をきいてくれなかったのはお前のほうだ」
と涙ぐんだ。(120)

明朝のどんでん返しがなければ、この場面は、それなりに感動的な場面である。しかし、島田と別れた「私」は同僚に電話をかけ、第二組合の人数(百三十人)を確かめる。対して島田は、十時には会社に戻り、社内にビラを張り始める。

この心情(和解)と行動の乖離をどう考えればいいのか。それが現実生きる人間の事態だと言ってしまうえば、それまでだが、二人に後ろめたさや苦悩がない訳ではなからう。例えば、「私」は、

家に帰り着くまで、私は「やさしく、やさしくなければ」とつぶやきつづけた。早く酔いが醒めてほしかった。(120)

「私」は酔いのせいもあり、少なからず島田の考えに賛同した、もしくはそう思った。が、彼の頭の中には、島田たちとの明日の戦いがあり、それ故に、「酔いが醒めてほしかった」。そして、彼は「ふと母に逢いたくな」る。母に会うことによって、自分を浄化したい、自分を許してほしいという思いがあつたのかもしれない。ここに、理想(やさしさ)と現実の狭間に陥った「私」がいる。

だが、「随分長いこと迷ったのち、私は結局、家に帰る」(120)る。「長いこと迷った」に、「私」の良心がうかがわれるが、「私」は、明日の戦いを優先する。そして、その戦いは、苦悩や「やさしさ」などみじんも感じられないものである。それが現実であり、会社人として当然のことかもしれないが、前夜からの心情の流れを考慮すると、良心ややさしさの消去であり、断絶と言っている。つまり、翌朝の戦いは前夜の和解を相対化して、島田の言う「やさしさ」などは消え去ってしまう。

五 翌朝―「私」と島田の戦い―

翌朝、「私」はいつもより一時間早く出社した。第二組合の立ち上げを社内知らせる「ビラや趣意書を張る」(121)ためである。ところが出社すると、「社の建物の前には、赤い旗が数十本並び、はち巻きをしめた共産系の組合員たちがピケを張っていた。」(121) 彼ら(島田たち組合員)は「私」たち(第二組合員たち)を待ち構えていて、両者の戦いが始まる。

「御用組合の犬」

島田がハンドマイクを口に当てて絶叫した。それに呼応して、「御用組合の犬」と組合員たちがシュプレヒコールをおこなった。(121)

島田は、前夜とは違い、「私」に「御用組合の犬」と「ハンドマイクを口に当てて絶叫」してきた。そこには、彼の言う「やさしさ」はどこにもない。

対して「私」は、強引に突入を図るが、「何人かに衿首をつかまれて、引き倒され」る。

「なにぐずぐずやってんだ。力づくでもいいから入っちゃまえ」

押し問答をしている執行部の連中に私は怒鳴った。私の声で執行部員たちは、玄関に突入した。(121)

「私」は計画を立てるだけではなく、ピケに向かって突入するよ

うに、行動する人間である。

ばい体当たりし、玄関を抜け、階段を駆けのぼった。(121) 彼も「怒号に向かって力いっぱい体当たり」するなど、全力で戦っている。

その後、彼が事務所に入ると、島田たちが作ったビラが「壁という壁に張られ」ていた。

「かまわねエから、あいつらのビラをはがしちまえ。責任は俺がとってやる」

私は先廻りされてうろたえている執行部員にそう言った。(116)

「私」の指示で、執行部員たちはビラを剥がす。そして、事務所の机の上に置かれた「ガリ版刷りの小冊子」には、「私の名前と常務の名前」があり、「働く者の権利を奪う者と、それに踊らされた出世欲の塊りとの卑劣な結婚」(121)とあった。

「御用組合の犬が、ビラをはがしたぞ」

島田がハンドマイクを私の耳元に近づけて叫んだ。(122)

島田は「私」を「犬」と叫び、非難する。だが、島田たちの妨害も「叫ぶ」程度であり、血が流れる如き暴力的なものではなかった。

私は島田のハンドマイクを手で払いのけ、きょうから新しい組合の執行部室となる資料室へ走った。(122)

そして、廊下で出会った年取った守衛は「私」を見るなり、次のように言い、作品は終わる。

「きのうの夜の十時ですよ。十時から、ビラを張り始めましてねエ。あたしゃ、赤穂浪士の討ち入りかと思いましたがよ」(122)

この守衛のセリフ―「赤穂浪士の討ち入りかと思いましたがよ」―に

は、彼の興奮とどことなく滑稽味がある。つまり、「赤穂浪士の討ち入り」は、浪士たちの強い意地や恨みなどの武士としての命を賭けての闘争であるのに対して、「私」と島田たちの戦いは真剣であるとしても、ピケやハンドマイクの怒鳴り合い程度である。当たり前のことだが、命を賭けての闘争ではない。つまり、赤穂浪士と比較することが不適切であり、どこか、島田たちの行動を戯画化する効果があり、「どたばた劇（お祭）」のような雰囲気醸し出す。

前夜の和解が翌朝の戦いで一掃されたように、守衛のセリフは、「私」と島田の戦いを、赤穂浪士たちのものと比較することによって、結果的に、軽く（相対化）する。前夜の「やさしさ」の相対化に続いての、二重の相対化である。

六 ま と め

前述したように、島田は翌日の第二組合設立を知った上で、「私」と飲んでおり、自分の部下には第二組合非難のビラや小冊子を作らせていた。その後「私」と別れ、十時には会社に戻り、ビラを張り玄関にピケを張った。

「私」は彼の言葉に心を動かさし、島田の主張―「優しく、優しく、人間がみんな、やさしくなったら、それでいいんだ。」―に賛同する。そして、島田の「私」が好きだ、「友だちになろう」により、二人は和解する。その底には、敵対する相手だとの本音があろうが、彼らの言うやさしさや和解は、全くの嘘ではなからう。二人の言う「やさしさ」は、現実に対して単純すぎるし、実行不可能であ

るにしても、人を動かす力がある。「やさしさ」は、人にとって、不可欠のものだからである。

だが、二人は、翌日にはそう思った思い（優しさ）を抜きに戦う。厳しく言えば、島田たちの語る「やさしさ」や和解は、頭の中でのことにすぎず、現実には力を持たない。その結果、二人の言動に深みや複雑さがなくなり、作品として、現実の深刻さや人間の内面の奥深さを描いているとは言えなくなり、読者に与える力も強くない。

仮に、島田の言う「やさしさ」が力を持ち、主人公たちに現実との相克や内面的苦悩があつたら、この作品は深みを持っただろう。

むしろ彼らは、その場その場の状況や雰囲気に合わせて、言動を行っている感がある。酒や騙し合い、そして、組合の闘争が、彼らのエネルギーを引き出して、酔っ払いの場面や翌朝の闘争場面は、作られた「お祭」のようである。それが、老守衛の言う「赤穂浪士」との批判になったのだろう。

以上のように、二度の相対化が「私」と島田の内実を軽くして、作品中途半端感を与えている。やはり、島田の言う「やさしさ」が魅力的で、二人の和解や戦いも面白いのだが、物語としては成功していない。⁽⁸⁾

それらがこの作品の特徴であり、限界（弱さ）である。

（注）

(1) 『宮本輝全集』13（新潮社 1993・セ）所収の「後記」による。

(2) 同様に、文庫本の解説者である荒川洋治氏は、同じ文庫本所収の「力」や「眉墨」・「五千回の生死」などは褒めるが、この「アルコール兄弟」についての言及はない。

- 『五千回の生死』（新潮文庫 1990・4）
- (3) 「アルコール兄弟」の本文は、単行本『五千回の生死』（新潮社 1982・6）による。()内の数字は、単行本の頁数である。
- (4) 安藤始『宿命と永遠―宮本輝の物語―』（おうふう 2003・10）
- (5) 宮本の以前の短編「寝台車」(1979・二)の会社員・甲谷には、大仰なセリフや行動の裏に、「深い屈辱」や悲しみがあつた。また、「やさしさ」は、宮本輝の小説では少なからず描かれている。例えば、「アルコール兄弟」に時期的に近い、「夢見通りの人々」(1982・9～1985・11)の主人公・春太も優しい人間であり、短編「パケツの底」(1986・2)の主人公の「ほく」も優しさを持つ。
- (6) この作品が発表されたのは昭和59年(1984)であり、世間はバブル景気を迎えてつあつた。昭和30・40年代の高度経済成長時のような、個人よりも会社を優先するような風潮は少なくなつたし、お互い(会社対組合)が憎み合うような対立は減少した。
- 作品の内容や雰囲気を見ると、「アルコール兄弟」の現在時間は、昭和50年代前半ころと見た方がふさわしい。
- (7) 例えば、「寝台車」の甲谷には、仕事と自己との乖離に苦しむ姿が描かれていたが、ここにはない。また、「パケツの底」では、厳しい現実の中で、他者を助けようとする主人公の「やさしさ」が描かれている。それが、主人公たちに力を与えているし、作品をより良いものとしている。
- (8) 人の持つ「やさしさ」は宮本輝の描きたいものの一つであろうが、現実には存在しにくいものである。そのためか、現実の厳しさ・暗さなどを重視し始めた「避暑地の猫」(1985・3)や『真夏の犬』(1990・3)以降、初期作品から描かれていた(「やさしさ」を含む)叙情性が少なくなっていく。
- この作品で、「やさしさ」が島田たちによって強調されているのは、作者としては、現実と理想(やさしさ)の共存への試みだったのかもれない。
- だが、主人公たちの内面―苦悩や悲しみなどに深く入らず、表面的に流れてしまった。やはり、「アルコール兄弟」は、「パケツの底」

などと比べて、失敗作と言わざるを得ないだろう。

〔二〇一九・九・二六 受理〕

コントリビューター：町 博光 教授(日本文学科)